

熊本地震復興支援チャリティーリレーコンサート

～電子オルガンと他の楽器との共存を目指して～

堀内 美紀

平成 28 年 4 月 14 日の熊本地震で被災された全ての皆様に心からお見舞い申し上げます。震災に対し、自分にできることは何かと考え、奈良県で、いかるが音楽コンクール様が主催する「熊本地震復興支援チャリティーリレーコンサート」に参加した。

被災地に音楽を通じ、想いを届けたい・・・そんな音楽家（音楽愛好家）を対象に、ピアノ・管楽器・弦楽器・声楽等様々なジャンルからの出演を募った。持ち時間 1 組 15 分以内。これがわずか 1 日で 50 組程の応募が集まるという反響で、開演を当初の午後の予定から午前に変更しても収まらず、結局 2 回の公演に分けて行うこととなった。Part 1 は 5 月 22 日日曜日、Part 2 は 6 月 4 日土曜日、両日朝から晩まで 20 時間にわたり約 90 組、のべ約 180 名によるコンサートとなった。Part 1 の翌日には全国紙の奈良県版にも掲載

され、同新聞社のインターネットでも取り上げられた。（参加人数はいかるが音楽コンクールのブログより抜粋）

日頃は電子オルガン奏者として活動中だが今回の参加規程には電子オルガンが対象になっていないことから、声楽（Soprano）として参加した。

Part 1：2016 年 5 月 22 日日曜日

- ① L'ascia ch'io pianga オペラ「リナルド」より
私を泣かせてください 作曲：ヘンデル
- ② O mio babbino caro オペラ「ジャンニ・スキッキ」より
私のお父さん 作曲：プッチーニ
- ③ ミュージカル「マイ・フェア・レディ」より
踊り明かそう 作曲：Alan Jay Lerner
ピアノ伴奏：濱口 真理子氏（公式伴奏者）



Part 2 : 2016 年 6 月 4 日土曜日

- ① L'ascia ch'io pianga オペラ「リナルド」より
私を泣かせてください 作曲：ヘンデル
- ② ミュージカル「マイ・フェア・レディ」より
踊り明かそう 作曲：Alan Jay Lerner

- ③ Amazing Grace イギリス民謡
ピアノ伴奏：南 なほき氏



チャリティーコンサートはクラシックに限らず、電子オルガン奏者として参加経験があるため比較検証する。テーマは大きく2つとし、1つは選曲、もう1つは環境である。

前者の選曲については主催者サイドの強い要望がない限り、出演者側に委ねられることが多い。主演者側が主催者側の意図を汲み、復興支援ソングを演奏したもの、祈りや平和などが曲の中に含まれたもの、チャリティー対象の地域に象徴される作品を取り入れることもある。中には出演者の十八番や演奏枠の時間を考慮して決めることもある。より多くの方に聞いてもらうために認知度の高い曲を選ぶこともある。電子オルガンで出演の際は東日本大震災の義捐金ライブのため、日本人が手掛けた作品や、上演が延期になったミュー

ジカルが早くできるように取り入れることやテーマパークが閉鎖に伴い1日も早く開園できるよう選曲したのを今でも記憶に残る。

電子オルガンと声楽の選曲で一番大きく異なることは、電子オルガンはインストルメンタルで、声楽には歌詞がつくことだ。そのため、他の楽器より想いを歌詞に載せ、より高いメッセージ性を伝えることができることだ。今回参加したコンサートの Part 2 での Amazing Grace は基本的には英語の歌詞であるが、途中で日本語の歌詞に変更し、次のように歌った。

光り輝く幸せを 与え給うあなた
大きなみむねに委ねましょう 続く世界の平和を・・・

今回の選曲は Part 1 ではできるだけ多くの方がご存知のものを、Part 2 は少し変えて歌詞にも着眼点を置いた。電子オルガンでは地域に関する選曲が復興につながると考えていたが、今回の声楽の参加で、音楽と言葉が持つエネルギー活用できたと感じた瞬間があり、手ごたえもあった。

後者の環境であるが、問題は個々によって異なる。電子オルガンで参加した際は、東日本大震災で当時、節電するように言われた中で（節電自体の問題は論点が異なるため触れず）、音楽や照明で電気を使い、日常生活以上の電力を使用することに対する懸念と第1回が東日本大震災の1週間後の為、インターネットでライブの模様を発信することに対する懸念があった。そのため開催自体も一時は中止することも視野に検討し、最終的には開演で合意したものの、全員衣装は過度に派手なものは避け、照明も必要最小限にとどめることになった。今回参加した熊本地震ではないことだが、すればいいということではなく何事にも TPO に照らし合わせ吟味すべきであることはいうまでもない。

今回は Part 1 で吹奏楽のアンサンブルがあり大ホールで開催、Part 2 は小ホールで開催された。大ホールで出来たからよかったものの、ホールが取れないときは電子オルガンを活用すると人数が必要な楽器編成であっても置き換えられるため、活用方法は考えれば電子オルガンを有効に活用すれば可能であることに気がついた。

さて、今回参加して感じたことは音楽で震災のために役に立とうとする気持ちはどの楽器も奏者も同じであるはずが、なぜ電子オルガンは電子オルガンだけで行うのか、なぜピアノ・声楽・管弦楽・吹奏楽は呼びかけあうのに電子オルガンを相容れないのか。これまで挙げてきた項目に様々なポイントがあると考えられるが、大きな理由のひとつには互いに知らないことが多いと思料する。

電子オルガンの立場からすると、声楽を除く全ての楽器は音色に過ぎず、ボタンひとつまたはプログラミングすれば瞬時に音色を出すことが容易である。（演奏表現は別で、ここでは音が鳴るという意味である）

一方、ピアノや管弦楽や吹奏楽などはアコースティックなため楽器があれば電気があろうがなかろうが演奏できることである。アコースティックでないというだけで電子オルガンが閉鎖的になりがちだが、実際本学員の方々が多くの機会での他の楽器とハイブリット・オーケストラとして共演していらっしゃるところをみると決して融合できないという結論にはならないと考える。ただし、今回の電子オルガン奏者が全くいない世界で参加してみて、話を聞くと想像以上に電子オルガンを知られていないことを感じた。逆に電子オルガンのイベントに参加すると選択する音色の楽器の本来の使用法をどれだけ理解できているのか自分も含め反省しないといけな部分はあると感じた。つまり、電子オルガンとピアノなどのアコースティック楽器との融合には両方共に知識を持ち合わせ、活用できる人材が不足しているように感じる。それぞれ楽器を演奏する際は自分のことで精いっぱいになることはあるが、互いの楽器を理解してこそ電子オルガンの可能性も見いだせると考える。

自分の知る演奏者の中に、声楽を志し何らかの事情で電子オルガンに変更した演奏者、反対に電子オルガンを志し声楽に変更した演奏者がいるが、両方しているもの残念ながら自分以外知らない。しかし、電子オルガンは多数の音色を扱うためできるだけ多くの生楽器に親しみ、またアコースティック楽器をしている方々も電子オルガンに対して理解しあい共存できれば、より電子オルガンの可能性は広がるのではないかと。一人では大したことはできないが、自分が色々な楽器の方々の懸け橋となり、また周りの方々が力添えいただき、電子オルガン界を盛り上げていくことができれば、新たな音楽ステージの可能性がみえてくるような気がする。

最後に、今回の執筆にあたり、電子オルガンと声楽の共存に関し、温かいお言葉と熱い思いを頂戴した阿方俊先生、写真の掲載に関して許可をいただいたピアノニストの濱口真理子氏と南なほき氏に感謝し、今後本学会に電子オルガンの未来と希望を託し結びとする。

（ほりうち みき）